

# 音 楽 科

徳 田 典 子  
本 多 春 奈

## 1 音楽科における「よりよい未来を志向する子」

私たちは、日常生活の様々な場面で音や音楽にふれる機会をもっている。そして、音楽は私たちの感性を刺激し、生活に豊かさや潤いを与えてくれている。学校教育における音楽科でも、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わったりする力を育成することを大切に、生涯にわたって音楽文化に親しむための素地を養ってきた。

新学習指導要領では、音楽科で育成を目指す資質・能力を「生活や社会の中の音や音楽と豊かにかかわる資質・能力」と明示している。生活や社会の中で音や音楽がどのように役立ち、自分とかかわっているか、学んだことがどのように生活や社会の中の音や音楽とつながっているか、子どもが興味・関心をもって探求できるような指導が求められている。

そこで、本校音楽科では、音楽に豊かにかかわっていくために「音楽的な見方・考え方」を意識させる。音楽を一方的な見方や感じ方ととらえるのではなく、その中にある様々な要素や仕組みを聴き取ったり感じ取ったりし、それらが音楽に与える効果や影響について理解させる。そして、自分たちの演奏や音楽づくりに生かしていくことを大切にする。また、学校での学びだけではなく、生活や社会の音や音楽とも結び付けることで、さらに豊かな音楽とのかかわり方ができる子どもの育成をめざしていく。

以上のことから、音楽科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえた。

- ・ 音や音楽に目を向け そのはたらきについて気付こうとして学習を積み重ねていく子
- ・ 音や音楽を通して 通じ合い 響き合い 共に創り合う体験から 自分の表現方法を明らかにしていく子
- ・ 今までの学習を生かして 生活や社会の音や音楽と豊かにかかわっていく子

## 2 音楽科における決める授業デザイン

音楽科の授業で子どもは様々な音や音楽にふれ、自分たちの音楽の幅を広げていく。歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞の領域や分野において、思考・判断・表現する一連の過程を大切にした学習を充実させることで、子どもはどんな力がついてきたかを実感し、次の学びにつなげていくことができる。

「音や音楽に目を向け、そのはたらきについて気付く」とは、楽曲を構成する様々な音楽的要素に目を向け、そのはたらきが音楽に与える効果や影響について理解することととらえる。音楽の学習では、子どもは様々な楽曲を通して、音楽的要素と音楽との関係について学び、音楽を表現したり、鑑賞したりする経験を積み重ねる。この経験が、多種多様な音楽に出会ったとき音楽がもっているよさに気付くことにもつながり、どのような視点で音楽を聴いたり表現したりするのかを決める力になっていく。

同じ音楽でも、人によって様々な感じ方やとらえ方があり、その表現方法も多様である。音楽科の授業では、個人での思考や表現だけではなく、ペアやグループでの協働を大切に、新しい気付きや音楽の見方にふれる経験を積み重ねる。そして、音楽に対する考え方を広げ、感性豊かに表現する姿をめざしていく。子どもはグループで音楽表現を練り上げていく過程で、「こっちの方がいいかな。」「思いを伝えるには、この音をつかうとよさそうだ。」など、それぞれの表現について伝え合い、一つの音楽にまとめていく。様々な考えや表現方法を知り、それを試していくことによって、自分の思いに合った表現方法を明らかにすることができ、どのように表現するかを決めることにつながっていく。

音楽科では、生涯にわたって音楽に親しんでいくために、音楽に積極的にかかわり、豊かな

感性で音楽に向き合おうとする姿をめざしている。そのためには、学校教育の音楽科だけではなく、生活や社会の音や音楽にも視野を広げ、世の中の様々な音楽に主体的にかかわろうとする意欲を育てていくことが大切である。子どもの音や音楽への興味・関心が高まることで、様々な音楽とのかかわり方を決めることができるようになり、生活や社会の中の多様な音楽への関心を高めることにもつながっていく。また、普段なら聴き流してしまうような音楽に対しても、立ち止まって耳を傾けようとする豊かな音楽性を育むことができる。このような学びを積み重ねることで、子どもの感性や音楽性は豊かなものとなり、学校のみならず、自分たちの生活や社会の音や音楽への興味・関心へと広がっていく。そして、子どもが生涯にわたって音楽に親しんでいくための素地となっていく。

### 3 決める授業の手だて

#### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

新しい教材との出会いは、子どもにとって学びの第一歩である。子どもの意欲や学びへの原動力を喚起するきっかけとして、教材となる楽曲や学習材との出会いを大切にする。そして、これまでに聴いたことのない音や音楽に出会うことで感性を刺激し、「面白そうだ」「演奏してみたい」といった意欲につなげていきたい。

初めての教材や学習材に向き合う子どもは期待感に満ち、音楽との向き合い方や、アプローチの仕方、表現方法や題材に対し意欲をもって臨んでいる。子どもと教材との出会いの場が、学習全体の見直しをもつための場となるよう意識し、子どもが、この題材の終わりに「どんな力がつくか」「どんな表現ができるようになるか」などの自分の姿を想像することができる導入を行う。そのために教材の内容を吟味し、この題材を通してどんな表現をめざし、どんな力をつけていくのかを明らかにする。そして、様々な楽曲や学習材を通して、音楽的要素が楽曲に与える効果や影響について学ぶ経験を積み重ねる。このような学びの中で、子どもは自分で選択し、自分の思いを音にしたり、友達と協働したりしながら音を音楽に構成していく経験を重ね、豊かな感性を育むことができると考える。

#### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

多様な視点から課題を追求していくために、ペアやグループ活動を適宜取り入れていくことを大切にする。また、活動の形態を工夫することで、一人一人が思いを伝え合い、考えを広げ、豊かな表現につなげていくことができるようにする。さらに、子どもが協働して学びを深めていくために、工夫の視点を絞るなどの条件設定をする。「反復」をつかう、「強弱」を工夫する等、視点がはっきりすることで何を工夫すればよいのか明確になり、思いや意図を伝え合いながら、作り上げたものをふくらませたり、練り上げたりしていくことができる。

多様な学習形態の中で課題を追求・検討し、子どもが様々な発想を働かせながら音楽に取り組むことで、共に作り上げる喜びを感じられるようにしたい。

#### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

ふりかえりはこれまでの自分の学びを確認し、次の学びにつなげていくためのものである。音楽科では、形態を工夫したり、機会をとらえてふり返らせたりすることにより、これからの自分に生かしていくことのできるふりかえりを行っていく。

ふりかえりの場では、自分の音楽がどのように変容してきたか、この題材を通してどんな力がついてきたか、次の題材でもっと伸ばしていきたいことは何かなど、次の学びにつながっていくような意識をもたせる。例えば、題材の初めと終わりに録音したものを聴き比べることで、自分の成長を実感することができ、次の学びへの意欲をもたせることができる。また、ディスカッションや、ワークシートの記述によるふりかえりなど、それぞれの活動に合わせたふりかえりを行うことで学びを確認し、豊かな音楽的感性を育てていく。この力が音や音楽に積極的にかかわろうとする姿勢にもつながり、生活や社会の音や音楽に豊かにかかわっていく子どもの育成につながっていくと考える。